

評 価 委 員 講 評

三 宅 廉

三年に亘る本研究班は、小林教授の斡旋の下に小児科学、産科学、心理学、教育学、保育学の広汎に亘る母子のきづなに、とくに注目し、その健全な指導に使命を感じずる向学の士の集いで、誠に心あたままる、などやかな雰囲気の下に広く、深く医学にかかわりをもち人間味豊かな育児の原点を衝く会合として終始した感じがする。とくに厚生省が現在の日本の社会が如何に多くの問題を抱えているかに思を致し、その原因の究明に、最も小さいが最も強固な社会である家庭に目をつけられたのは慧眼であるといいたい。

かくて三年間に亘る各位の研究調査が発表されたが、その結果必ずしも解決に達したとはいえず、今後更に百尺竿頭一步を進めてその対策に頭脳を結集すべきだと考える。

今この研究会で取扱われた問題をまとめてみると、母と子のきづなが会を重ねる度毎に広義に発展し、母子関係が如何に広く、深く小児医学とかかわりをもっているかを知り得たのである。蓋し小児医学は広い意味の小児教育学であることを更めて立証した次第である。演題を集約してみると、母子間の交感、その分析及びその集計にまとめられる。

総論としてはコンピューター画像に処理される母子相互作用の分析が注目を惹き、各論としては先ず (1) 胎児期中の母子関係が明らかにされ、超音波断層法による胎動から、胎内の音響伝達による母子のつながり、プラゼルトンの胎内環境、母体側の母性意識、人間形成のための行動発達が論ぜられ (2) 分娩期では、分娩形式とくにラマーズ法出産中の母性意識 (3) 新生児期では分娩直後の母子分断につづいて起る母子相互作用メカニズムを究明し、人間味豊かな育児の原点を探り、更に母親の性と新生児の姿勢、行動、母親の育児行動との関連から全人的成長への追求がなされた。ことに極小未熟児の母子関係が取扱われ、保育器による母子関係、その家族との適応が論ぜられ、感覚的刺激の発育に及ぼす影響が認められた。(4) 乳児期では母乳の匂の識別と分析がなされ、更に栄養法と行動異常との関係、言語習得との関係、行動発達に及び、母子間の心理的距離が論ぜられ、入院による母子関係、退院時の家族への適応が述べられた。(5) 次に最近とくに問題となっている委託育児と母子分離の技術とその未熟性、職業婦人と家庭婦人の母性意識の差、保育における母子相互作用と社会環境の形成について論ぜられ、病的小児については、ホスピタリズム、母性剝奪症候群、これについては犬、猿を用いての実験による異常行動、更に心身症、癲癇、チック小人症、自閉症、ダウン症に於ける母子関係に及ぶ。(6) 母子相互作用の追跡的研究から、思春期に於ける母子関係が祖上にのぼる。(7) 教育意識について都鄙の比較がなされ、更に母親の育児態度と保育者の教育意識の差違が追究された。

以上のようなテーマが討議されたが、前に述べたように解決に到らず、ことに沖縄の報告によって育児の原点に立戻るべき声も叫ばれ、自然にかえれと叫んだルソーを今更の如く思い起す。ことに日本母性に強固な教育理念の欠けていることが叫ばれるに至って、結論として一般日本人の21世紀に向っての精神革命が必要だと考え、本研究会がこの希望に添うて更に存続されんことを祈って已まない。